

NO.723

□海外文献紹介□

手術前後の輸血は大腸癌再発リスクを増大させない

Perioperative blood transfusion does not increase the risk of colorectal cancer recurrence: *Weiden PL, Bean MA, Schultz P* (Cancer 60: 870-874, 1987)

手術前後の輸血が、その後の癌の再発リスクを増大させることが、しばしば報告されている。

著者らは、1977～1979年の間に大腸癌の初回手術を受け、調査時に死亡または5年以上生存している171人の患者を対象として、輸血と再発の関連を検討した。103人(60%)が手術前後1か月以内に輸血を受けた。再発患者は37人で、全体の22%に相当した。輸血を受けた103人中で再発は19人(18%)であり、非輸血患者68人中では、18

人(26%)であった。この中で Duckes' C₂ の患者においてのみ輸血、非輸血患者間で、有意の差をもって前者に再発が少なかったが、他のステージでは有意差を認めず、全体として輸血と癌再発または患者の予後との間に明らかな関連を認めなかった。

考案で、輸血と癌再発に関する多くのデータと文献が検討されたが、一方の議論、つまり、輸血が癌再発のリスクを高めるかもしれないといった可能性に基づいて、現段階の輸血の実施臨床を変更するのは早計と思われる。とは言っても、無論不必要な輸血は避けるべきであろうし、全血よりも赤血球を用いることには、感染や反応の危険を避けうるし、費用が安く済むなど、十分な医学上の理由がある。

【訳者コメント】最近、輸血が手術後の患者の免疫力を低下させるため、輸血を受けた患者で癌の再発リスクが高いとの報告が多い。日本でも沢田らの報告(大腸肛門誌 40: 621, 1987)のほか若干の報告がみられる。この論文の著者らは、自施設のデータからはこのような結論は引き出せなかったとして、疑問を投げかけている。つまり、著者らの研究では、Duck's C₂ ステージでは、むしろ輸血群の予後が良いとの成績を得たが、全体としては輸血と患者の予後との間に相関は認められなかったという。著者らが指摘したように、関連を肯定する論文が多いからといって、必要な輸血まで差し控えるのは誤りであろう。

(愛知県がんセンター消化器内科

小林世美 抄)